

## サヨナラの余滴

鍵岡正謹

岡山県にはすっかりお世話になった。なんの縁か岡山県立美術館長で働くことになり、なんと九年もお世話になった。縁を強いて云えば、姓名を名告るとき「谷崎潤一郎の『鍵』に岡山の岡、正月の正に謹賀新年の謹と書き、カギオカマサノリと呼ぶ」とやっていた。僕の名をショウキンと必ず呼ぶ先輩が居た、詩人で美術・文芸評論家の岡田隆彦、平成9年59歳で逝去、葬儀は黒住教で行われた。先祖が岡山の名家だった岡田先輩こそ館長に嬉しいし、県美の建築は親族で先ごろ逝去された岡田新一先生だった。僕の心底には岡田さんの代役のつもりがあった。▼着任早々に吉備路文学館で飯島耕一展が開かれ岡山出身と知り、更には安東次男が津山出身とも、お世話になりっぱなしの方々にも縁はあったのかと思ひながら、「岡山の美術」を前進深化させようと方向を決めた。なにしろ画聖・雪舟が故郷、その雪舟生誕600年が2020年に来る。是非とも雪舟展を開催して欲しいと願う。それにつけても岡山は秀れた美術家や芸術はもとより社会全般にわたり秀れた人物を輩出している。それは古来からの豊かな吉備の風土と吉備文化の所産だと、岡山に居る毎に思えた。▼岡山と六十代の僕は係れたことを喜び、お世話になった方々に深く感謝を申し上げたい。

勸君金屈卮 コノサカツキヲ受ケテクレ

満酌不須辞 ドウゾナミナミツガシテオクレ

花発多風雨 ハナニアラシノタトヘモアルゾ

人生足別離 「サヨナラ」ダケガ人生ダ

備後出身の吉備人で僕が住む杉並区民だった井伏鱒二の名訳をコラムの終わりに借り、余滴を汲む。

 岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

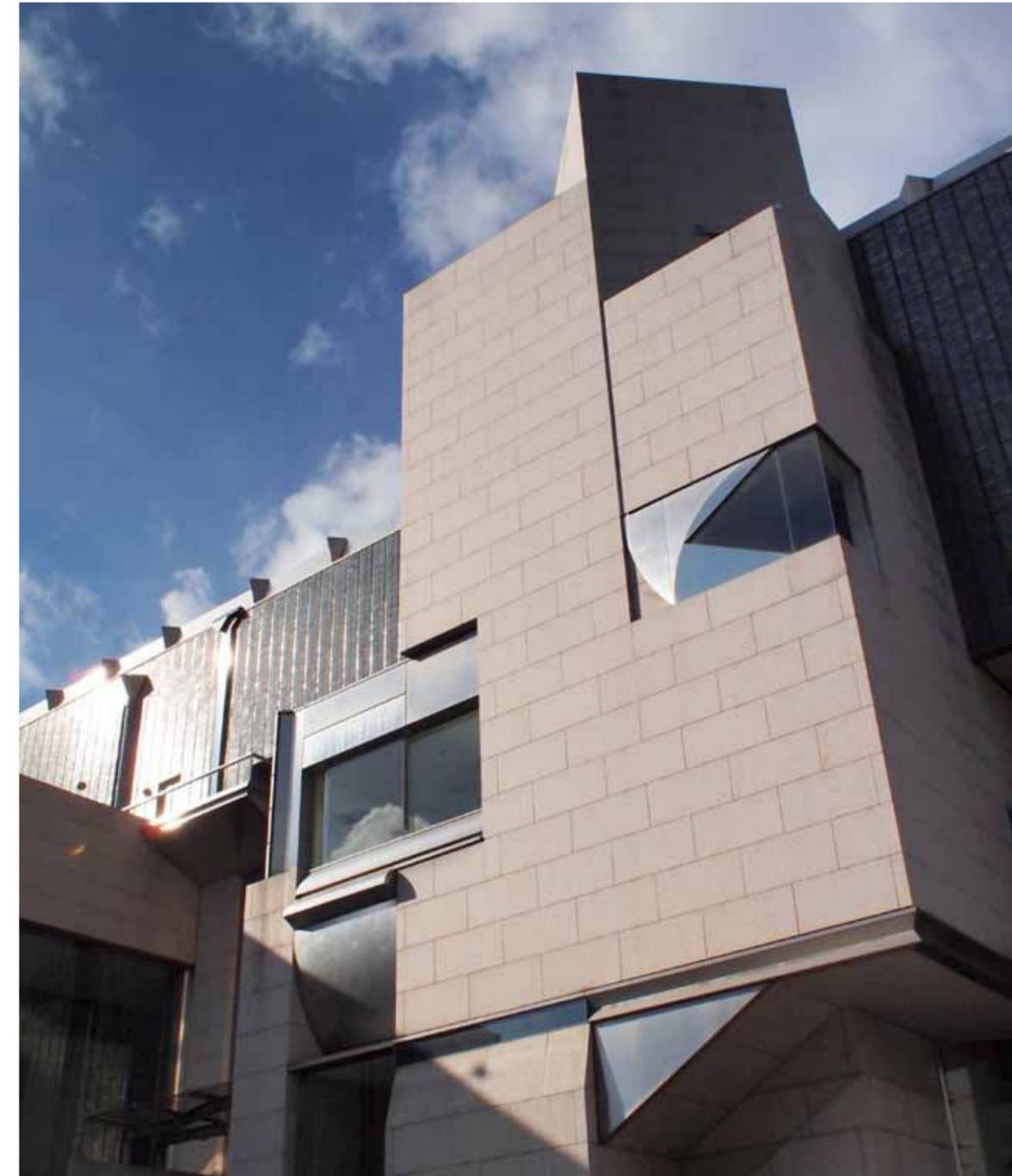
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

## 編集後記

大山真季

美術館ニュース108号をお届けします。2014年度の展覧会スケジュールが発表された昨年3月の時点から反応をいただき、多くの方々が心待ちにしていた「ムーミン展」がいよいよ開催となりました。同時開催の、五感で作品を体験することができる「目の目展」とあわせてお子様も気兼ねなく美術館をお楽しみいただければと思います。先日2015年度の特別展と「岡山の美術展」特別企画のスケジュールも当館ウェブサイトで公開しました。今年度も現代美術、仏教美術、工芸、洋画からイラストレーションまで幅広い内容の展覧会を開催しますのでお楽しみに。



## 「美術館の紹介」vol.8

芸術を人々と、文化を社会とを繋いできた岡山県立美術館が昨年度には日本建築家協会の25年賞を受賞した。建築家である岡田新一氏が逝去されても、今なお彼の設計した多くの建築物は世界中いたるところで佇み、この先も永く在り続けるに違いない。

## バックヤード 岡山の美術展特別企画「目の目 手の目 心の目 体感の向こうに広がる世界」(2015.3.14-4.19)

福富幸(主任学芸員)

元気がよすぎる好奇心いっぱいの子どもは、美術館にとっても保護者にとってもハラハラどきどき。広々とした空間に身体はうずうず、そこかしこに興味をそそめるのがあり、注意する間もなく手が出ます。甲高い声はよく響きわたり…。(私の子どもたちもよく注意されています。)成長とともに少しずつ社会性を身につけていくのでしょうか、「お母さんだけ行けば？」と言われたりするとちょっと悲しい気持ちになります。子どもは大して興味もないし、自分は歓迎されていないと感じているのでしょうか。

私たちはあまり根拠のない先入観で、ハンディキャップの中でも特に視覚に障がいがある方にとって美術館は縁遠い存在、と思っているのではないのでしょうか。美術館をあまり利用しない方にとっては、美術館は敷居が高い、美術館は高尚だ、なんて声が時折聞こえてきます。

美術ってちょっと特別なもの、でも本当は誰にでも楽しめるものであるはず、美術館はそのお手伝いをすると、その想いはずっと変わりません。

近年、美術館や博物館、劇場などでバリアフリー化やUD研修などをきっかけにアクセシビリティを高める活動がいろいろと行われています。県立博物館では昔の道具を高齢者のコミュニケーションに役立てたり、当館でも展覧会に合わせて小中学生の団体観覧の受け入れや出張講座、さまざまなワークショップを通じて、美術との出会いの場を提供してきました。盲学校との連携事業も4年にわたり、先生や生徒たちと一緒に視覚に障がいがあっても美術を楽しむ方法を探ってきました。子どもたちと回を重ねて出会ううちに美術館にいる私たちにもその成長が如実に感じられるようになりました。

岡山県立大学とは平成22年に現代テキスタイルの展覧会を開催した後、また一緒に何か新しいことができなにかと考えてきました。テキスタイルの特性は私たちの身体感覚に寄り添う素材であることから、体感する楽しさを提供する展覧会をと思い立ちました。

バーチャルな世界が当たり前となり、実体験が乏しくなった子どもたちが自身の持っている感覚に気づける



福井一尊《フラットを目指すかたちA》の一部には小学生が制作した成果物も使用されており、アルミ部分は叩いて音を出すことができる。

ように、視覚に障がいがある方々にも鑑賞しやすいように、小さい子ども連れでも参加しやすいように、そして美術って面白い、創作って楽しいということが伝わるように、そういった思いに共感してくれた8人の作家の協力を得て、「目の目 手の目 心の目」展はできあがりしました。

県立大学から大量の布を扱う島田清徳、美しい糸(ロープ)で空間を演出する草間喆雄、繊細なミクストメディアの三橋遵、西粟倉村の間伐材を活用する南川茂樹。I氏賞奨励賞を受賞した京都文教短期大学の北川太郎は石彫を、美咲町出身で島根県立大学で幼児教育や障害者アートを研究対象としている福井一尊は金属で。このふたりは展覧会に先駆けて出張講座も行いました。小学生を相手に授業をし、制作することは作家たちにとっても初めての体験でした。展覧会ではその成果も合わせてご紹介します。そしてこれまでも戦争や障がい、虐待など社会の問題とともに生きる子どもたちに目を向けてきた太田三郎。彼らに視覚、聴覚、嗅覚、触覚に働きかける作品を、作品は触られることを前提に、そのリスクを含めて出品を依頼しました。

問題は味覚。美術館にとって「飲食」というのは何かとハードルが高いのですが、五感がテーマとなる

と味覚もはずせません。フードコーディネーターでもあるくらしき作陽大学の向後千里が香りと触覚でおいしい食を考える展示を行います。また数量限定ですが、オリジナルスイーツも配布します。視覚をなくし、差し出されたものを手に取る、出された物を食す、相手への信頼なくしてできないことだと思えます。「食」を考えるということは生きることを考えることでもあります。

たとえば源氏の頃、かすかな衣擦れの音、残り香で恋人を感じました。少し前の時代、祖父母の世代は、賞味期限ではなく、舐めてみて匂いを嗅いで、判断ができました。乳幼児はまずなんでも手で触って口に入れて確認します。野生に生きる動物を例にあげるまでもなく、五感でさまざまなものを判断することは生物が持つ原始の力だと思えます。

盲学校の先生が、最近では触り方を知らない、と言われました。視覚の有無に限らず、触る、は、決して壊すことではないのです。目でみる、手でそっと、でもしっかり触ってみる、衣擦れや小さな鈴の音に耳をすまし、かすかな香りを吸いこみながら、作家が差し出したものを受けとめる。目の前にあるものだけではない“何か”。人間だけが持つ“心の目”でしっかりみて欲しいと思えます。



島田清徳《境界(きょうかい/きょうがい)division-k-2015》部分  
2015年 素材:ナイロン



太田三郎《バードネット》部分  
2015年 素材:農業用防鳥網、使用済み切手



草間喆雄《虹色の糸の橋》、南川茂樹《作品鑑賞装置》展示風景



三橋遵《行く雨、来る雨》、《雨法師》展示風景

## 種をまく —岡山県総合教育センター初任者研修—

岡本裕子(主任学芸員)

3回目の「種をまく」は、教員研修のレポートです。「初任者研修」は、県立高等学校、並びに県立特別支援学校の先生方が受講生で、例年120人～160人程度が対象となります。教育センターの研修の目的は、郷土の伝統と文化について理解を深め、文化に関する教育の充実に努めると共に、自らの教育活動にとっても重要と思われる事項をみつけ、これを実際に活かそうとする、となっています。これを受けて美術館は、保護者以外の大人で、児童・生徒の一番身近にあって影響力がある先生方に、児童・生徒が博物館施設に出会う場をコーディネートしてほしい、との願いをこめて、受講生が、主体的な美術館体験、美術体験ができるようなプログラムづくりを行っています。今年も、研修の最終着地点を、「作品をみるという行為を通して“文化、芸術、美術、美”について自分なりに考える」「作品をみるという行為から“生まれるもの、起こること”について自分なりに考える」としました。受講生が、今まで気にしていなかったもの、なにげなくやり過ごしていたこと、あるいは当たり前と思っていたもの等について、「揺さぶられ、考える」場を提供できるプログラムを目指しました。まず、受講生が自分自身に問いかける「あなたは、どうですか」という導入部分。これは、3つの質問から今の自分を認識し、その後の活動の中でも無意識に継続して問いかけることができるような質問です。一つ目は「あなたは美術が好きですか」、二つ目は「あなたは、美術館に来ますか」、そして三つ目は「あなたは美術作品が好きですか」と続きます。次に作品を主体的に鑑賞する時間を十分にとり、グループワーク・全体共有での振り返りの時間、そして沈黙の時間として「県美で研修をやって、美術館、美術作品について一番心に残ったこと」を一人ひとり記述しました(以下一部を紹介します)。

・美術作品に触れることで生活や考え方が豊かになると感じた

・「美術作品=美しいもの」ではなく、「アート=考えるもの」だとわかった

・よいとされるから残っている作品ですが、よいという基準が点数化できないところでの見方をするとところに深さを感じた

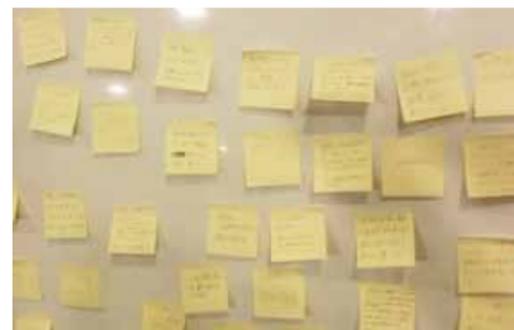
・美術館は作品を前にして自問自答するところ、自分の感情と向き合える場所だと感じた

・美術館はきっかけ、発見を与えてくれる場所

研修のねらい、そのねらいを達成するためのプログラムがどうであったかの一つの評価が、ここから読み取れるのではないのでしょうか。そして、今回の受講生である先生方が、「中堅」となった時(5～10年、もしくは20年後でしょうか)、学校教育の中で博物館施設をどのように活用しているかという、長いスパンで追跡していくということも今後必要となってくると考えています。

※「種をまく—岡山県立岡山盲学校 美術館学習—」(『美術館ニュース』104号掲載:2014年3月発行)

「種をまく—岡山県立岡山支援学校 出前鑑賞授業—」(『美術館ニュース』105号掲載:2014年6月発行)



沈黙の時間(一番心に残ったこと)



作品を主体的に鑑賞した時間

## 雑感:ビザンティン聖堂装飾プログラムと展示プラン

橋村直樹(学芸員)



ヴェリア、救世主キリスト復活聖堂(1314/15年)、東壁を望む

昨夏、専門としているビザンティン聖堂装飾プログラムに関する論文を執筆した。ギリシア北部の都市ヴェリアにある救世主キリスト復活聖堂のフレスコ壁画(1314/15年)を取り上げ、聖書場面や聖人像がいかに取捨選択されて配置されているかを考察することによって、装飾プログラムが全体としてどのようなメッセージを伝えているのか明らかにすることを試みた論考である。ビザンティン聖堂装飾では、ひとつひとつの聖書場面や聖人像がそれぞれ個別の意味を持つだけでなく、それらが互いに関係し合うことによって新たな意味が生まれたり、ある教義的意味を強調したりすることになる。わたしが議論した聖堂では、南北壁面のブラインドアーチに《キリストの磔刑》と《冥府降下》の説話主題が対面して描かれることによって、救世主キリストの死と復活を通じての贖罪という教義が強調され、装飾プログラムには死後の魂の救済という創建者の願いが反映されている。

そうした装飾プログラムをいったい誰が考えたのだろうか。一般的に、ある一つのビザンティン聖堂の装飾プログラムを考案した人物が誰であったのかを明らかにすることは難しい。そもそも聖堂創建や壁画装飾の経緯を伝える史料などがほとんど残っていないからである。しかし、上述の聖堂では、封建銘文の中で聖堂創建の理由が語られ、創建者と画家の名前が明記されているため\*、装飾プログラムの考案に創建者や画家が関わっていたことがわかる。おそらく創建者は、死後の魂の救済というメッセージが伝わる装飾プログラムを組むよう画家に依頼し、さらには具体的な図像配置の指示も出し

たのだろう。あるいは、封建銘文において「最高の画家」と称される画家が、図像の選択や配置の決定にもっと積極的に関与したのかもしれない。いずれにせよ、装飾プログラムの決定に携わった人物は、死後の魂の救済という願いが反映された装飾プログラムとなるよう、限られた聖堂空間を満たす図像を選択し、その配置について思案したのである。

この装飾プログラムを考案するという行為は、改めて考えてみると、美術館での企画展やコレクション展において展示作品を取捨選択してその配置を決めること、つまり展示プランを立てることによく似ている。岡山県立美術館の展示室は可動壁によって空間を区切って比較的自由に壁面を作ることができるのだが、コレクション展では時として展示替えスケジュールなどの制約のため、前の展示の壁面をそのまま利用することがある。わたしが先の論文執筆後に担当したコレクション展でも、不本意ながらそのような状況となった。だけど、前の展示の壁面を引き継ぎ、コレクションの中から統一的なテーマのもと作品を選んで配置を考えていたとき、思いがけず、いま自分が行っていることが、限られた聖堂空間の中で図像配置を決定するという聖堂装飾プログラムの考案者の仕事と近いと感じたのであった。美術館に勤めだしてから遠くなりかけていたビザンティン世界がほんの少しだけ近くなったような気がした。

※この画家や封建銘文については拙稿「『最高の画家』カリエルギス—奉獻銘文における賛辞表現をめぐって」『岡山県立美術館紀要』3号、2011年、35-42頁の中で議論している。

## 所蔵品の修復と額装について

廣瀬就久(学芸員)

所蔵品を見ていると、先だって購入やご寄贈がありながら、展示のためには修復と額装が必要なことがあり、収蔵庫に保管されたままの作品があります。

今回紹介する2点の作品は、1988年に当館が開館する以前の1980年度に、岡山県総合文化センターに寄贈された赤松麟作(1878-1953)の作品です。画面を見ると修復が、そして「まくり」の状態であることから、額装が必要でした。2点とも表裏双方に作品があり、額装をするにあたって、両側から画面が見られるようにする必要があります。本来ならば購入後まもなくできれば良いのですが、経費的な問題もあり、図1は2012年度、図2は2013年度に、修復と額装を行いました。

赤松に関しては、裸婦、風景画などを含めて、100点の作品を所蔵していますが、男性の裸体像はこの図1のみです。表裏両面とも上半身を描いた画像で、制作年は不詳ですが、おそらく明治時代の、若年期における制作かと考えられます。

図2の婦人像を見ると、この像を描く前に、逆さ方向に男性の裸体を描いているようです。裏側には横向きに、用水沿いの家を描いており、画面右下に「四月 赤松」と書いています。婦人も風景も、影は紫色で、師匠であった黒田清輝ゆずりです。この作品も同様に、若い頃に描かれたと言えるでしょう。

100点の作品を見ると、女性像、裸婦、風景、花と鳥、など多くの作品から、画家の関心のありか、時代による移り変わりをみる事ができるように思います。通例の「岡山の美術」展では、1点から数点までの展示ですが、2008年4月15日から5月18日には、県内で所蔵される赤松作品を交えた特別陳列を行いました。時期を見計らって、今回の作品を含めながら、赤松作品の展示を行いたいと考えています。



図1.(表)《裸体男性像》/(裏)《裸体男性像》  
制作年不詳 表裏とも54.0×41.4cm 油彩・カンバス  
(作品名は当館による仮称)



図2.(表)《婦人像》/(裏)《用水沿いの家》  
制作年不詳 表54.1×42.0cm 裏42.0×54.1cm 油彩・カンバス  
(作品名は当館による仮称)

## 展覧会スケジュール

3月  
March

3月14日|土|—4月19日|日|  
【岡山の美術展】  
目の目 手の目 心の目  
体感の向こうに広がる世界

各展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

4月  
April

3月20日|金|—4月19日|日|  
【特別展】  
トーベ・ヤンソン生誕100年記念  
MOOMIN! ムーミン展

今もなお世界中で愛され続ける「ムーミン」。本展は原作者トーベ・ヤンソンの生誕100年を記念した、日本初公開作品を多数含むかつてない規模の原画展です。タンペレ市立美術館・ムーミン谷博物館が所蔵するオリジナル原画、習作、スケッチなどを通して、奥深いムーミン世界の魅力をお届けします。

4月4日|土| 14:00~15:30  
記念講演会 「トーベ・ヤンソンの  
知られざる素顔、魅力、思い」  
講師 渡辺翠氏(フィンランド文学翻訳家)  
会場 2階ホール(先着210名)

5月  
May

4月28日|水|—6月7日|日|  
【特別展】  
有為自然—岡崎和郎、伊勢崎淳、中西夏之

本展覧会は、日常を取り巻くささやかな事をもとに独自のオブジェを制作することで知られる岡崎和郎、備前焼の人間国宝で伝統と革新を実現してきた陶芸家・伊勢崎淳、そして絵画にまつわる稀有な思考と制作を続ける画家・中西夏之の三人展になります。中西が用意したインスタレーションを「舞台」にして、残る二人の立体作品がその周囲を彩ることによって、今という時代における自然と人間の在り方を、芸術を視座に探ります。

4月4日|土|、4月5日|日| 11:00~  
G T 「目の目展ギャラリートーク」  
講師 出品作家、担当学芸員  
会場 2階展示室 ※要観覧券

6月  
June

5月5日|火| 14:00~15:30  
公演 『『なげかけ』と『たどり』2015』  
演者 鈴木昭男(サウンドアーティスト)、宮北裕美(ダンサー)  
会場 地下展示室 ※要観覧券

5月30日|土| 14:00~15:30  
記念講演会 「岡山的美術について」  
講師 石山修武氏(建築家・早稲田大学理工学部名誉教授)  
会場 地下講義室(先着70名)